

サスティナブルな マウンテンリゾートを目指すには オーストリア レッヒの事例

日本スノースポーツ＆リゾーツ協議会 参与

丸山 徹也



日本以上に温暖化が進むヨーロッパ

世界規模で進む温暖化はスノーリゾートにとっても重要な問題です。特にヨーロッパでは毎年クリスマス休暇が始まるまでに安定した積雪がある事が、その地域経済にたいへん大きく影響します。多くのマウンテンリゾートはこの問題を解決するために人工降雪設備に多額の投資をしています。日本人にも人気のスイスのグリンデルワルドにあるアレッチ氷河では氷河の融解により毎年数十メートルの後退が進み、フランスのモンブラン山系の氷河は著しい縮小のために、かつて人気だったオフィステコースが消失する事例も報告されています。その中でオーストリアのアルペンスキー発祥の地と言われるアルベルグ地方にあるレッヒは1990年代から再生可能エネルギーの導入とカーボンニュートラルな村づくりを行ってきました。私が暮らす白馬村は1995年からこのレッヒ村との姉妹交流を続けて今年で30周年を迎えました。この取り組みについて紹介をしたいと思います。



レッヒはオーストリアのフォアアールベルグ州に北西部に位置し、サンアントン村に接する人口1600人程の小さな村です。日本ではありませんがヨーロッパではイギリスのダイアナ妃が愛したスキー場として、また世界中のセレブが集まるスノーリゾートとして知られています。私がこの村の人々と交流して30数年が過ぎましたが、その当時のレッヒ観光局長が言っていた忘れられない言葉があります。「これからは環境問題を考えないリゾートはお客様から評価されなくなると、」既にヨーロッパでは氷河の融解が進んでいる事について問題となっていましたが、まだまだ日本ではスキー場の環境問題の議論はそれほど本格的に始まっていなかったと思います。

日本ではあまり知られていませんが、オーストリアをはじめヨーロッパの標高1000m以下のスキー場では雪が降る事はあっても積もることが無くなっているのが現実です。またイタリアでは標高が低いスキー場が設備投資をする際に銀行から融資を断られる事例が起きています。標高の高いスキー場でも降雪設備の導入が顕著で標高2000m以上のエリアでも積極的に設備の導入が進んでいます。その中でレッヒのスキーリフト会社Lech Bergbahnenでは品質管理、環境管理マネージメントシステムISO9001・14001を90年代半ばには導入しました。現在でもスキーリフト運営に関してこれらの認証を取得している会社はオーストリア国内を見てもでも少数で先進的な取り組みです。また村としても1999年から脱化石燃料の取り組みをスタートし山小屋などを除いた村内98%施設で化石燃料の使用を止め、木材チップを使用したボイラーによる暖房、給湯システムに切り替えました。この事により盆地にあるこの村から排出される排熱が無くなり気温の上昇が抑えられる効果があります。



環境対策・持続可能性の具体例（レッヒスキー場）

1. 再生可能エネルギーの使用

- ・スキーリフトやゴンドラの電力は主にオーストリア産の水力発電によるグリーン電力。
- ・排出ゼロの運営を目指す「カーボン・フットプリント」監視体制を導入。

2. 人工降雪の効率化

- ・最新の「低エネルギー・高効率」人工降雪機を採用。
- ・気温・湿度を常時測定し、必要最低限の雪だけを製造。
- ・自然の地形を活用した人工貯水池を使い、循環利用を徹底。

3. 騒音・景観への配慮

- ・ゴンドラやリフトの設置・更新時には、視覚的景観や騒音の最小化を設計段階から反映。

4. バイオマス木材ボイラー工場（Biomasse-Heizwerk Lech）

- ・初建設：1999年にオーベルレッヒ（Oberlech）に最初の施設が建設され、1999年にはレッヒ本村向けのボイラー施設も稼働開始。
- ・拡張：2010年にはツュルス（Zürs）にも4基目が建設され、Lech/Zürs地域全体で計4つが稼働中

5. 燃料・環境効果

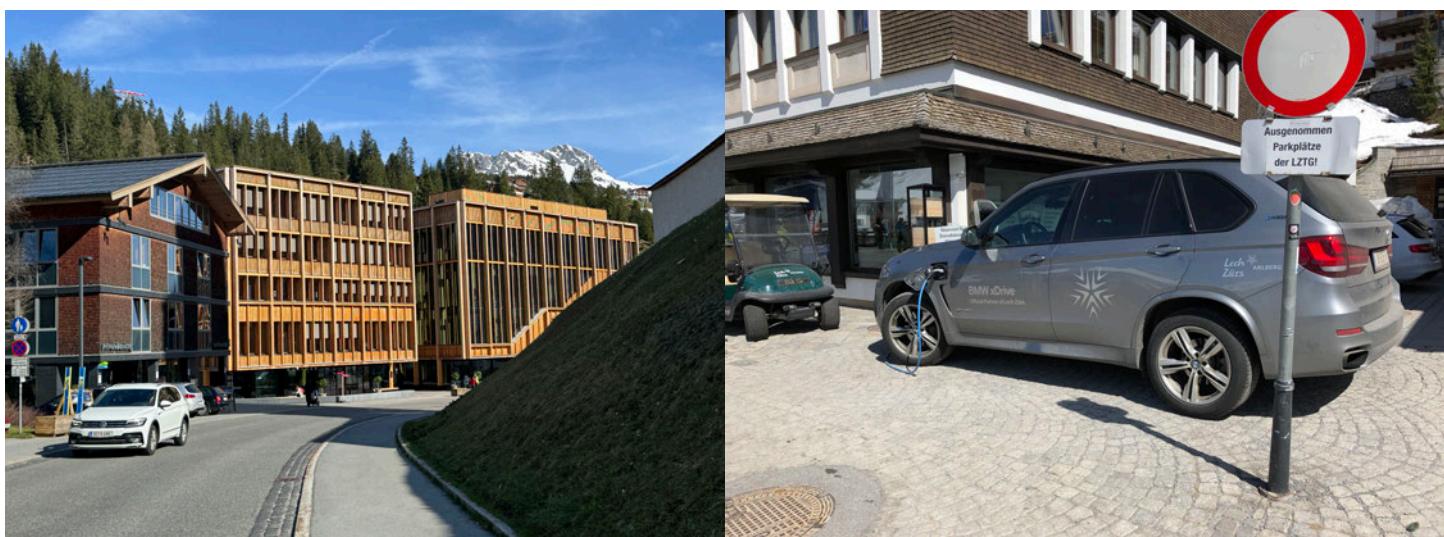
- ・燃料：地域の製材所から出る木材チップ、樹皮、木くずなどを活用しており、地域循環型の燃料供給を実現
- ・供給網：レッヒ村内の建物（家庭・宿泊施設・公共施設）の約98%がボイラー熱網に接続されており、年間で約45,000 m³の木質チップを使用し、石油暖房換算で450万～775万リットル相当を削減CO₂削減：年間約5,000～7,000トンのCO₂排出削減効果があり、SO₂排出も大幅低減

6. Lech/Zürs エネルギーモデルとしての意義

- ・地域的成功例：村・宿泊施設・観光施設ほぼ全体の暖房をカバーする再生可能エネルギー施設へと成長
- ・持続可能性：「質を重視した観光」の拠点にふさわしい環境戦略として、観光資源とも一体に運用

持続可能な質の高い観光を重視するために行っていること

レッヒ村は冬の間は隣村への道が雪崩予防の為に閉鎖され、行き止まりになるという地形的理由もあり環境保護に積極的に取り組んできました。2004年にはこの活動が評価されヨーロッパで一番美しい村「Entene Florale Gold Medal」に選ばれています。単にスノーリゾートとしてだけでなく、自然との共生と美しい町づくりのモデルとしても高く評価されました。その中でレッヒ村が行っている事例を紹介します。



1. 村の駐車場はすべて地下に設置

- ・レッヒ村中心部には地上の一般駐車場がほとんど存在しません。
- ・車で到着した観光客は、すべて地下の公共駐車場または宿泊施設内の地下駐車場に案内されます。
- ・美観の維持：アルプスの自然景観と伝統的な村の街並みを守る。
- ・歩行者中心の街づくり：村内中心は歩行者ゾーンとして整備され、スキーパーも安心して移動可能。
- ・騒音・排気ガスの低減：地上から車を排除することで環境負荷を抑制。

2. 電気自動車（EV）専用駐車区画・充電ステーションの整備

- ・レッヒの公共地下駐車場には電気自動車専用スペースとEV充電スタンドが完備。
- ・宿泊施設の多くもEV充電に対応しており、観光客のEVシフトを支援。
- ・村は州政府やエネルギー会社と連携し、EV観光インフラの導入を支援。
- ・環境配慮型の移動手段（EV、電気バス、シャトル）の利用を観光プロモーションの中でも推奨。

3. スキー場の「定員制」導入（キャパシティ制限）

- ・レッヒは世界でも数少ない、スキーリフト利用者数に上限を設ける「定員制」を導入しているスキーリゾート
- ・スキー場の「質」と「安全性」を守るために、1時間あたりの搬送人数（最大約14,000人）を超えないように管理
- ・混雑の防止：コースの混雑を避け、安全で快適な滑走環境を維持
- ・環境負荷の軽減：過剰観光による自然破壊・騒音・リフト渋滞を防止
- ・「量より質」の観光モデル：高級志向の顧客に対応しブランドイメージを保護

※この「定員制（Gästekapazitätsgrenze）」は、観光政策として法的に決定されており、レッヒ村の観光哲学の根幹をなしています。



4. 地元農家・畜産との連携

- レッヒ村と周辺地域（ツーク、ヴァルガウ、ブラウデンツなど）の小規模農家と直接契約し、地元食材を優先的に仕入れ
- 特に以下の農産物・畜産品が地産地消されています

チーズ	アルプス山中の放牧牛乳を使用した山のチーズ（Bergkäse） アルム（高地放牧場）で製造。
ミルク・バター	無農薬牧草を与えた乳牛から。 レッヒ周辺の「Heumilch（干し草ミルク）」としてブランド化。
牛肉・鹿肉	高地の自然放牧または狩猟によるジビエ。 ホテルのグリルや郷土料理に使われる。
パン	地元のベーカリー（例：Bäckerei Walchなど）で 自家製ライ麦パンやザワーブロートを提供。

レッヒにとってのスキー文化は「ライフスタイル」

年間100万人ほどのゲストが訪れるレッヒにとってスキーのない暮らしは考えられないものです。毎年訪れる常連客（Stammgäste）を受け入れる滞在文化、それには暖炉を囲むアプレスキー（食事・音楽・社交）大切にし、アルプスの自然と共生したデザインの木造ホテル、そしてアールベルグスキークラブを中心としたスキー選手の育成を通じて、高水準なスキースクール運営など子供から大人まで楽しめるライフスタイルを提供しています。



丸山 徹也 ／ MARUYAMA Tetsuya
一般社団法人スノースポーツ＆リゾーツ協議会 参与

八方尾根観光協会 会長
Mt.6（ベスト オブ クラシックマウンテンリゾート）実行委員長
公益財団法人 長野県スキー連盟 総務本部長
一般社団法人 白馬村観光局 執行理事